Experience of Trans-border Movement: The life story of a Lahu elderly man in Northern Thailand

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nishimoto, Yoichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00053901

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



越境のライフ・ストーリー
― ある北タイ・ラフ族男性にとっての国家・国境・国籍 ―

西本　陽一†

†金沢大学人間科学系　〒920-1192 金沢市角間町

E-mail: †yoichi@staff.kanazawa-u.ac.jp

要旨

本稿は、タイ北部のラフ族男性（60～70 歳代）によるライフ・ストーリーを提示し、キリスト教徒ラフ族住民が、国家、国境、国籍についてどのような認識をもっているか考察するものである。ラフ族はミャンマー・シャン州やタイ北部などに暮らす少数民族で、歴史的には焼畑耕作に伴う移動の他、中央政府の直接統治拡大やミャンマーでの民族紛争により移動を繰り返してきたが、近年には政府規制などによりその移動性は大きく制限されるようになった。本稿で提示するラフ族男性のライフ・ストーリーが示すのは、各民族に所有された複数の勢力圏からなる前近代的な世界観であり、国民国家的な世界観とは異なる国家、国境、国籍にかんする認識である。

キーワード：越境，ライフ・ストーリー，経験，ラフ族，タイ

1.　はじめに

1997 年、文化人類学的なフィールドワークをおこなうために、私は北タイのキリスト教徒ラフ族村にひとりで滞在していた。標準タイ語はある程度使えたが、ほとんどの村人は私とタイ語[1]を話そうとせず、一方で私は村で話されているラフ語は分からない状態だった。そんな中で、標準タイ語の上手な中学生を助手に、村の各世帯を回って世帯状況について悉皆調査を始めたが、多くの村人は「ドーイプームーン（タイ国内の山[2]）で生まれた」と答えた。しかし、村での滞在が長くなってからはっきりしてきたのは子供を除く村人のほとんどが、ミャンマー生まれだったことだった[3]。タイ国政府は「山地民」（chao khao）と呼ばれる、タイ北部の山地少数民族に対する国籍付与に厳しい態度を示していたため、外国での出生を人々は隠したがっていたのだった[4]。

さらにフィールドワークを続けていると、P 村のラフ住民が国、国境、国籍について私とは異なった世界観をもっていることが分かってきた（Nishimoto 2000）。当時 20 歳代後半の調査者だった私は、日本で生まれて、日本国籍をもち、日本語を話し、日本人として育っ

てきたことについて意識以前の当然のことと捉えていた。P 村のラフ住民と暮らして実感したのは、出生地が国籍、言語、帰属意識には必ずしもそのまま結びつかないということだった。ラフ族は自らの国をもたない一方で、P 村の住民は、ミャンマーとタイのいずれの国にも国民として帰属しているという意識はほとんどないようだった。

フィールドワークの際に、他人が自分とちがったものの見方や世界観をもっていることを、私たちは主にその他人の言語表現によって認識する。これに関してブルーナー（Bruner 1986）は、ディルタイの中心概念「経験」（Erlebnis）に依拠しつつ、現地住民による「表現」を人類学者が研究するための視座を示している。「経験の人類学」が対象とするのは、人々が実際に生を経験しているあり方、つまり、出来事が意識によって受容される有様である。ブルーナーにとって、生とは時間的な流れであり、「現実」とは時間の流れの中で存在したことのすべてである一方、「経験」とは人々によって意識された現実であり、「表現」とは、人類学者の研究する人々自身による経験の分節、表象または表現である。自身の生についての語り（本稿で言う「ライフ・ストーリー」）は、「経験」についての現地住民による「表現」の一形態であり、そこでは人類学者という外来者による表象という一方的な関係ではなく、現地の人々自身が自らを表象し、「表現」の作者となる過程が含まれる。人間が直接経験できるのは自分の生だけであるが、他人による「経験」の「表現」を解釈することを通して、他人の「経験」の理解に近づくことが出来る[5]。

「現実」と「経験」と「表現」との関係は単純ではない。第一に、「現実」と「経験」と「表現」との間にはつねに一定のずれがある。さらに、「現実」と「経験」と「表現」とは、それぞれあらかじめ別個に存在する所与のものではなく、意識による反照という行為の中で、同時的に形成される。「我々にとって現実は、内的な経験によって与えられた意識という事実の中にしか存在しない」（Bruner 1986: 4）。生は時間的な流れであり、あらゆる「経験」は記憶された過去についての人々による反照から生れるが、反照は記憶された過去のうち、あるものに光を当てるとともに別のものを無視する。この意味で、「経験」とは人間主体による解釈の過程である。そして、現在における「経験」は、同時に過去を考慮し、未来に思いをはせる故に、そこで過去と現在と未来にはある一貫した意味が与えられる。ここで言う「意味」は、「経験」に外在してどこかに存在するものではなく、「経験」の作用の中で生まれ、過去と現在と未来とを結びつけるものである。このように、「経験」は単なる知覚や認識ではなく、人間的な感情や期待を含み、人々の歴史意識によっていろどられている。

東南アジア大陸部国境地帯の少数民族が、比較的自由に国境を越えて往来し、親族・経済・政治的ネットワークを超国家的に築いてきたことは、これまでも多くの研究者によっ

て指摘されているが[6]、少数民族の視点から、国家、国境、国籍という抽象概念がどのように捉えているかを明らかにしてくれる研究は少ない。Chang（2014）は、中国、ミャンマー、タイ、台湾などを移動する雲南系華人の詳細なライフ・ストーリーを提示し、彼らの越境経験についてのすぐれた報告となっているが、インフォーマントの語りは、著者の編集を経た完成品として提示されるのみである。つまり、調査者の他者理解の過程の多くは捨象されているのである。

さて私は、最初のフィールドワークから 20 年以上もたった 2018 年に北部タイのラフ族村（W 村）において、ラフ族男性からライフ・ストーリーの聞き取りをした。おもに口承世界に暮らすこのラフ人は、自分の年齢をはじめ、人生のエポックを確たる年として記憶していないが、ミャンマーからタイへの移住とタイでの生活を語るこの男性のライフ・ストーリーは、現在北部タイに暮らす同年代のラフ族住民の経験を代表したものと言える。そして、20 数年前に私が調査村で感じた、私のものとは異なる、ラフ住民による国家観と世界観を再現するとともに、新たな発見を提供するであった。

以下ではまず、私たちが他者の認識を知るようになる過程を出来るだけ再現するために、調査者である私の編集をあまり加えず、現場そのままの対話の形で、ラフ老人のライフ・ストーリーを示したい。その後で、老人のライフ・ストーリーから考えることが出来る、ラフ族住民の国家、国境、国籍にかんする認識について考察する。

2. ラフ族老人のライフ・ストーリー

ラフ族（La Hu）は現在、中国雲南地方、ミャンマー・シャン州東部、タイ北部などに暮らす少数民族で、ラフ語の話者である。歴史的には焼畑耕作を主な生業とし、数年ごとに移動を繰り返す生活をしてきたが、近年には焼畑耕作地の減少と政府規制により、水田耕作や出稼ぎが重要性を増している。タイ国内に居住するラフ族については、古くは 19 世紀から記録があるが、その多く（特にキリスト教徒）がタイへ移住するのは 20 世紀後半である。かつてラフ族は、他の山地少数民族とともに、高い移動性で知られたが、その理由は焼畑耕作に伴う移動の他、18 世紀後半からの中国雲南地方における中央政府の直接統治拡大や 20 世紀におけるミャンマーでの民族紛争による移動であった。ラフ族はまたキリスト教徒が多いことでも知られる[7]。ラフ族においてキリスト教は百年以上の歴史をもち、ミャンマーとタイのラフの少なからぬ部分はキリスト教徒である[8]。

ここに示すのは、2018 年 3 月に北部タイのラフ族村（W 村）にて、推定 60〜70 歳のキリスト教徒ラフ族男性から聞き取ったライフ・ストーリー（24 分間）である[9]。会話の最後

の方では、老人の妻が登場し、一度だけ発言する。発言する人物を次のように示す。

「私」＝筆者
「老」＝W 村の高齢男性（60～70 歳代）
「女」＝男性の妻（60～70 歳代）

私： そうすると、あなたはモンサット（Mong Hsat[10]）で生まれたのですか？
老： そうだ。モンサット地方で生まれた。
私： 両親もすでにクリスチャンだった？その時に？
老: （両親は）もう死んでしまった。（モンサット）からここに逃れてきて（hpaw la leh[11]）、ここで死んだ。
私： どうしてここに逃れてきたんですか？
老： ミャンマー国[12]は国が乱れていて（sho sha ve）、戦争し合っていた（bo da ve）から。
私： だれが戦争し合っていたのですか？
老： 反乱軍（taw hko）やラフ族が戦っていた、ミャンマー族と。それで住んでいられなくて、逃げてきたんだ（cheh ma hpeh leh hpaw la ve）。
私： 反乱軍（taw hko）というのは、シャン族のことですか、ラフ族のことですか？
老： ちがう（ラフ族じゃない）。シャン族のことだ。
私： ラフ族とシャン族が戦い合っていた？
老： ラフ族とシャン族も戦っていたことがある。そして（ラフ族とシャン族は）ミャンマー族とも戦った。でもラフ族はミャンマー族に勝てなかった。
私： あなたも戦ったことがありまか？兵士をしたことがありますか？
老： したことない。小さいときから学校に行き（li hen leh）、クリスチャンだったから[13]。

私： 学校に行ったというのは、ミャンマーの学校に行ったんですよね？
老： そうだ。山の学校で、（村は）先生（sa la）を雇っていたんだよ。その先生がラフ語を教えてくれ、ミャンマー語を教えてくれた（La Hu li ma la ve, Man li ma la ve）。昔はね。
私： ミャンマー語も知っていますか？
老： もう知らない。昔、使っていたときには知っていた。年をとったので忘れてしまった。
私： 何年勉強しましたか？
老： 学校のことかい？（li hen ve la?）2、3 年ぐらい学校に行ったかなあ（li hen ve heh）。
私： ラフ語も学び、ミャンマー語も学んだということですか？
老： そうだ。ラフ語とミャンマー語を学んだ。
私： ラフ語はどうやって学んだんですか？
老： 文字の発音から教えてくれた[14]。
私： 文字の発音ですか？
老： そう、初歩の文字から教えてくれたんだ。先生がいたんでそうやって学んだ。英語（Ka La li[15]）は知らない。ラフ語は知っているけど、英語は学んだことがないから知らない。
私： ミャンマー語も、ラフ人の先生が教えてくれたのですか？
老： そうだ。ラフ人の先生だった。ラフ・バラー人[16]。
私： バラーですか！

老： 遠くの、チェントゥンの方に、昔は、教会の中心はそこだっただろう。パンワイ[17]というところだ。ラフの国パンワイと言った（La Hu mvuh mi no Pa Vai k'o ve[18]）。聖書学校を建てて教えていた、聖書を教えていた（can li ma ve）[19]。
私： その先生もそこを卒業したのですか？
老： その先生もそこ、チェントゥンからやって来た。バラーはあの辺に住んでいる。昔は、おれたちの地方[20]にはバラーはいなかった。ラフニの住んでいるところには（バラーは）いなかった。中心（aw hkui pui）と言うよね。

私： あなたはラフニですね。ここ W 村では、ラフニとラフナとどちらが多いですか？
老： ラフニしかいない。ラフナもいるけどほんの少しだ。バラーはいないんじゃないかな。
私： 昔は、ラフニのクリスチャンは少なかったんですよね？
老： ムカー（Meu Hka）というところがある。モンサット地方で昔からクリスチャンだったところだ。それ以外は、「点蝋者」（peh tu pa[21]）が多い。ラフ[22]は「異教徒」（law ki[23]）が多い。

私： あなたの村は何という名前ですか？
老： 昔のやつかい？
私： そう、モンサット近くのやつ。何という名前？
老： ロカナ（law k'a na[24]）と言った。人が多かった。
私： メゲー（Meh Keh）じゃなくて？
老： 川の名前はメゲーだ。村のことをそう呼ぶこともある。村の名前はロカナ、山峡の地で、峡谷に住んでいたので（そういう村名になった）。
私： 何軒あった？
老： たくさんだ。40、50 軒以上。昔は大きな村だったから。大きな村で、先生を雇って、（子供たちに）勉強を教えていたんだ。
私： 先生はひとりだけだった？
老： そう、ひとりだけだった。
私： 先生は牧師もしていた[25]？
老： 牧師もしていた。日曜日には牧師の仕事をした（bon ma ve）。
私： その先生は毎日野良仕事をしていたのですか？
老： 月曜日から金曜日までは学校で教えていた。土曜日は教えなかった。日曜日には礼拝する（bon law ve、礼拝で牧師をつとめるという意味）。そんな感じだった。

私： あなたの両親の職業は？
老： 職業なんてもんはなかった[26]。野良仕事だけだ。
私： 焼畑をしていたのですか？
老： 農業をしていた。
私： 田んぼはあった？
老： 田んぼはなかった、われわれの時代は。
私： 田んぼはなかった？
老： なかった。
私： 焼畑だけ？
老： 焼畑･･･木を伐って、畑にしていた。田んぼはしていなかった、昔は。
私： 森が豊かなところに住んでいたんだね？
老： そう。森の木を伐って、燃やして、耕していた。
私： 大木もあった？

老： あったさ。伐り倒した。
私： （大木も）伐ったんだよね。
老： そうだ。伐り倒した。（人力で）斧で伐り倒した。
私： 斧でもって、こうやって？　（斧で大木に挑む仕草をする）
老： そうだ。森の木を伐っていた。今はもう木を伐ることは出来ない。政府が禁止している[27]。木を伐ったら捕まってしまう。

私： あなたは兄弟は何人いる？
老： 本当の兄はいない[28]。死んでしまった。弟が 2 人いる。
私： 2 人だけ？
老： そうだ。子や孫たちは多いけど。
私： お兄さんはなぜ死んだんですか？
老： 病気だ。村長だったけど、老いて死んだ。
私： ミャンマーにいたときに、小さいときに死んだんじゃないね？
老： 違う。年取って死んだんだ。老いて死んだ。

私： モンサット地方はクリスチャンは少ないね？
老： 多くなかった、昔は。今はラフナが多い[29]。モンサットにもチェントゥンの南の方から（ラフナ）がやって来ている。中国から新しく逃れてきた（suh hpaw ya la ta ve）人々だそうだ。このタイ国にも、ラフナで新しく逃げてきた（suh hapw ya la ta ve）人々がたくさんいる。
私： 中国からきた人々は、クリスチャンではないよね？
老： クリスチャンもいるし、そうでない者もいる。
私： ラフナでクリスチャンでない人もいるということ？
老： いる。（でも、）クリスチャンになっている者も多い、中国でも。
私： 今は多いですよね。
老： 昔はいなかった。
私： 中国には行ったことはないですか？
老： 行く人は多いけど、おれは行ったことがない。

私： そうすると、何年にあなたはここに移ってきた？
老： えーと、ずっと前だね。この村も 50 年以上になるから。
私： 村を作ったときに来たのですか？あなたは誰と一緒に来たんですか？
老： 村ごとやって来たんだ（hpaw la ve）。向こうに住んでいた村、10、20 軒ぐらいまとまってやって来た（hpaw la ve）。
私： 村 10、20 軒！大きな集団ですね。
老： そう。大集団でこうしてやって来た（hpaw la ve）。
私： リーダーは誰だったんですか？
老： リーダーは死んだと言ったとおりだ。リーダーはおれの兄でジャラ村長といった。
私： 12 村でやって来たのは全員ラフニだった？[30]
老： 全員ラフニだった。
私： 全員クリスチャンだった？
老： 全員クリスチャンだった。
私： ここに来たのは、歩いてきたのですか？
老： 昔は（どこに行くのでも）歩いたもんだった。
私： 何日かかった？
老： 月曜に出たら土曜に着くという感じだ（6 日かかった）。

私： どこに泊まったんですか？
老： 妻や子供たちを連れて、米を担いで、道ばたで寝た。そうやって歩いてきた。
私： 道ばたで寝た？
老： そう。道ばたで。
私： 人の家はなかったんですか？
老： なかった。道ばたで寝て、水があるところだとご飯を炊いて、大荷物を担いでやって来た。
私： 遠かった？
老： 遠かったよ。
私： 牛や水牛も連れてきたんですか？
老： 連れてこなかった。遠くて連れてこられない。

私： ジャラが村長でしたよね？
老： そうだ。
私： （他に寄らずに）まっすぐここに来たんですか？
老： あそこのサントンドゥの方にも、焼畑を燃やした後の時期に来た。4 月に焼畑を拓く時間はなかった。そして正月祭を過ごした後に、ここにやって来た。
私： 4 月にやって来た？
老： そう。あそこにしばらくいてから、ここにやって来た。
私： 正月にここに着いたのですか？
老： 向こうで正月祭を過ごした後で、ここに来たんだ。
私： サントンドゥには何年いたんですか？
老： 住んだことはない。昔サントンドゥには一族の者が住んでいた。大きな村だった。飛行機も降りた。タイの飛行機だ[31]。
私： サントンドゥはラフニ村ですか？
老： ラフニだ。おれたちは一族だ（aw vi aw nyi yo）。
私： あなたたちより先に来たのですか？
老： そうだ。おれたちは後にやって来た。連中はずっと昔から（サントンドゥに）住んでいた。
私： そうすると、しばらくそこに滞在してから、ここに来たということですか？（サントンドゥには）何ヶ月いたんですか？
老： 4 月に（ミャンマーを）出た。稲刈りをして、脱穀をして、正月祭を過ごしてから、ここに来たんだ。
私： 正月祭は 1 月ですよね？
老： 12 月に正月をやって、新年に入って、ここにやって来た[32]。1 月に。

私： なぜここに村を作ったのですか？
老： ここには田んぼをやる場所があったんで、やって来たんだ。
私： 人は住んでいなかった？昔は？
老： 昔は人は住んでいなかった、人はいなかった。
私： シャン人もいなかった？昔は？
老： いなかった。向こうのバーンマイ村[33]あたりには（シャン人は）いたけど。向こうにカレン人が少し住んでいただけだった。この辺の田んぼ用地には人は住んでいなかった。荒れ地だった（heh pui k’aw yo）。
私： それで、荒れ地を拓いたんですか？
老： 荒れ地を拓いて、村を作って、住み始めた。
私： 田んぼも拓いた？

老： 今では、各自少しずつ田んぼをもてるようになっている。
私： 当時、ここにやって来たときには、田んぼはなかったんですよね？
老： そう、なかった。各自が自分の田んぼを拓いて、耕して生活したんだ。
私： 焼畑はしなかった？その当時は？
老： したよ、焼畑もやった。田んぼも少しばかりやっていた。今では焼畑ができなくなったんで、田んぼだけやって暮らしている。
私： 田んぼだけしかないのですか。
老： 田んぼは各自少しだけある。子供も多いから（子供たちに田んぼを分配して各地の分は小さくなった）。
私： どうして焼畑はないのですか？
老： 森の木を伐ることができないから、焼畑はもうやれない、今では[34]。
私： 禁止されているのですか？
老： 木を伐ると逮捕される。

私： ここに来たときには、何軒で来たのですか？
老: 12 軒だったか、忘れたよ。ずっと昔だから覚えていない。遠くの山の高いところ（hk'aw hk'o）に住んでいた。こっちの低いところには学校があった。
私： 学校はどこにあった？
老： あそこにあった。生徒がいなくなって、学校も壊してしまった。それ以前には、こないだなくなった王様も 2、3 度来られた[35]。われわれの村に、なくなった王様も来られたんだ。お姿を見たよ。向こうの田んぼの堤も王様が下さったものだ。
私： ここには 12 軒でやってきて、それから他の家もやって来たんですよね？
老： 後でやってきた。
私： 少しずつ人が増えていった？
老： 学校があったんで、人が移って来たんだ。
私： 当時は山の高いところに住んでいたのですか？この村には住んでいずに、森に住んでいたんですか？
老： 当時は、ここに村はなかった。最初は森に村を作った。
私： そうすると、学校が出来てから、ここに降りてきたんですか？それとも最初からここに住んでいたんですか？
老： それで、あそこの高地には住むなと言われて、下には学校も出来たので、降りてこいと言われて、それで降りてきた。昔はむこうの山の高いところに住んでいた。
私： だれがそう言ったのですか？
老: 王様の妻の兄弟でモムチャオ[36]という人だよ。高地には住むな、気にくわない（ma daw caw ve）と言ったんだ。下のここの学校があるところに来て住めと言ったんだ。
私： そうすると昔は、あちこちに小さな村を作って住んでいたんですか？
老： 小さな村だ。昔はまだ人も少なかった。学校が出来て人も多くなった。人が多くなって、向こうにももう一つ村が出来た。
私： あっちの新 W 村[37]ですか？
老： そう。新 W 村もできた。ここの住人から分かれたものだ。
私： 新 W 村には学校がありますか？
老： ない。向こうのメーサラックには学校がある。ここの子供もメーサラック村の学校に通っている。
私： 今は学校はないのですか？
老： ない。生徒がいなくなったんで、建物も壊してしまった。その前は 2 つあった。先生の宿舎は壊さずに残っている。

私： タイ国は住みやすいですか？
老： タイ国は楽しいよ。何も（嫌なことは）しなくてよくて、おれたちは農業だけをやっていられる。向こう（ミャンマー）だと、大変だ（sho sha）。政府（a cu ya）に反抗する奴らもいて、（村人は）荷物を背負わされる（ポーターに徴用される）。おれのような奴にも、荷物を背負わせる。自分たちが荷物を背負えないと、おれたちに背負わせる。
私： ポーターをさせられる？
老： そう。戦争があると（村人は）ポーターをさせられる。それで住んでられない。戦争になると生きてられない。・・・
私： 荷物を背負いに出ると、何日ぐらいやらされるのですか？
老： おれたちはやったことはない。早くから逃げていたから。戦争が始まったときには。逃げろ、と言われて（逃げたので、）兵士にはならなかった。それで荷物を背負ったことはない。
私： あなたがタイ国に来たのは何歳の時ですか？
老： あの頃は、3、40 か 50 歳にはなっていなかったんじゃないかな。40 歳ちょっとだったんじゃないかな。その頃、うちの小さな子（の背）がこれくらいしかなかったから。
私： 小さな子も一緒に来たんだね。
老： 小さな子が 2 人いた。ミャンマーからやって来たときには。
私： その頃、国境には見張りの兵士はいなかったのですか？ミャンマーからここに来るまで、国境に兵士はいなかった？
老： 当時はいなかった。（国境警備の）兵士もいなかった。やっかいなことはなかった。そうやってやって来た。
私： （国境を）行ったり来たりも簡単だったんですね。
老： 当時は、行ったり来たりも簡単だった。今はもうだめだけ。難しくなった（sho sha a）。行ったり来たりも、昔は簡単だった（ma sho sha）。タイ国も昔は楽しかった（cheh pyaw a）。今じゃ面倒になって（sho sha o）、行ったり来たりも難しくなった。

私： あなたはミャンマーで結婚したのですか？
老： そうだ。ミャンマーにいたときに結婚した。
私： 何歳の時に結婚したんですか？
老： 数えてみると、まだ 20 歳にならないときだったか、分からない。向こうに住んでいたときだった。
私： ミャンマーには帰りたくない？
老： ちょっと遊びに行ったことはある。でも戻りたいとは思わない。
私： どこに行ったのですか？
老： メーサイから北上した。メーサイ、タチレック[38]のところからミャンマー人と一緒に[39]北上した。向こうに一族の者（aw vi aw nyi）がいれば、行きやすい。向こうの親戚が受入保証してくれれば、問題ない。
私： モンサットには行かないのですか？
老： おれは行ったことはない。行ったことがある人はいる。自分はここに来てからは（hpaw la ka）、一度も行ったことはない。
私： （モンサットに）親戚はいないのですか？
老： いない。皆（タイに）やって来ている（hpaw la o ve）。
私： じゃあ、行かなくてもいいですね。
老： 行かなくてもいい。

私： あなたはここに来てから、タイの学校へ行きましたか[40]？
老： 自分はもう年寄だったから、行ってない。
私： ラフ文字は知っていますよね？
老： ラフ文字は昔むこうで勉強したので、知っている。
私： ここに来たとき、ここにもう牧師（sa la）はいましたか？
老： ここに来たとき、移ってきたときは（hpaw la hta）いたけど、別れてしまい[41]、（牧師は）いなくなった。（ここにはもう住まない、）父母のいるところに行く、とその牧師も言ったので。
私： （その牧師は）ミャンマーに帰ったのですか？
老： 違う。牧師の両親もタイ国に移ってきていた（hpaw la ta ve）。両親のところに戻ると言って、おれらのところの牧師を辞めてしまったんだ。
私： （その牧師は）何という村に行ったのですか？
老： 自分も行ったことがないので（よく知らない）が、ノーパーというところ、ラフシ・バラー[42]の住んでいるところだそうだ。自分も行ったことがない。
私： それじゃあ、その牧師が去ってからは、牧師はいなくなったのですか？
老： いなくなった。その後は、年寄のラフ人の Da Vi[43]先生を一年養い[44]、ジャプ[45]先生も（牧師を）つとめ、自分の親戚の A Da[46]先生も牧師をつとめた。
私： A Da 先生はもうここにいないのですか？
老： いる。あの下の方の家だ。A Da 先生を知っているのか？
私： 知っています。（A Da 先生は）以前はメホンソンに（伝道に）行っていたんですよね。
老： メホンソンにはもういない。ファーンの生徒寮[47]にいて、メースアイの生徒寮にもいて、生徒寮で寮管をしていた。ファーンにもいたことがある。でも、生徒寮はなくなった。ラフ教会（Htai-Lim）の生徒寮はひとつもなくなった。（生徒寮を運営して生徒たちを）支援することが出来ないのだ。支援者がいないので（chaw ga pa ma caw leh）。

私： あなたにもふたり子供がいるんですよね？
老： おれの子供？ 6 人いるよ。
私： （生まれた子は）ひとりも死ななかった？
老： 死んだ子はいない。子供のひとりは牧師（sa la）をしている。村長グループの教会で。（この村には）3 つグループがあって、教会も 3 つあるんだ。ジャプ先生のがひとつ、村長のがひとつ、Re Beh[48]先生のがひとつ。
私： 牧師をしているあなたの子供は何という名前ですか？
老： I Saw という名前だ。
私： I Saw 先生ですか？
老： そうだ。昔の人物の名前をつけた。
私： 他の子供はどんな仕事をしていますか？
老： 他の子供は農業をしている（meu ca ve）。牧師をしているのは I Saw だけだ。その教会グループが牧師に選んだんだ。
私： あなたの子供は、この村にもふたり住んでいるんですよね？
老： この村に住んでいる子供のことかい？
私： そうです。
老： ここに住んでいるのは、息子ふたりと娘ふたりだ。ひとりは遠くに働きに行っている（kan te ca e ve）。もうひとりはあっちのメーサラックの下の方の村で、バラーと結婚して住んでいる。
私： バラーと結婚しているのですか？

老： そうだ。向こうに住んでいる。
私： 子供や孫は多いですか？
老： 子供も孫もいるよ。
女： 孫は結婚していない。遠くのバンコク近くで働いている（kan te ca cheh aw）。孫だ。まだ結婚していない、年頃の娘だ（ya mi ha）。学校も出た（priya yu o ve）[49]。
老： 遠くの、タイ国のチョンブリというところで、子供のひとりが働いている（kan ca ca cheh ve）。孫だ。去年、韓国にも行った。だけど長くいられなかった。ここでパスポートを作って行った（passapaw te leh k'ai leh）けど、警察に見つかって捕まり、送還されてきた。それで（韓国には）いられなかった。本当は韓国で働いて稼ぎたかったんだ。
私： どうして警察に捕まったんですか？
老： 外に出たところで、警察に見つかったんだ。ちゃんとパスポート、通行証を作って行ったのではなかったんで。でないと（合法的に）いられないんだ。警察に見つかったら、刑務所に入れられてしまう。
私： チョンブリでどんな仕事をしているのですか？
老： そこのタイ人のところで雇われて働いているんだ（Htai chaw geh kan ca ca cheh ve）。チョンブリというところ、タイ国の。こないだ正月には帰ってきた。
私： バンコクの近くですね。チョンブリに行く人は多いのですか？
老： 一族にはひとりかふたりだけだと思う。（チョンブリには）働きに行くのだ（kan ca ca e ve）。

3. ライフ･ヒストリーから見える国家、国境、国籍

以上があるキリスト教徒ラフ族男性のライフ・ヒストリーである。このライフ・ヒストリーからどのようなことが分かるだろうか。

このラフ族男性はミャンマー・シャン州南部のモンサット地方に生まれ、育ち、結婚した。両親は農民で、一家はミャンマーで焼畑を生業として生活していた。豊かな自然の中で、森の大木を人力で伐って燃やし、焼畑をしていた。

ミャンマーにいられなくなったのは、さまざまな民族軍による戦いが原因だった。村人は荷物背負いのポーターに徴用されるなどの虐待に遭った。10〜20 世帯が一緒になった「大集団」aw mo lon で、米を担ぎながら、タイまで 6 日間かけて歩いてやって来た。

タイでは一族の者 aw vi aw nyi を頼ってサントンドゥに一時滞在した後で、無住地を拓いて W 村を建てた。当初、彼らは山の高いところに集落を建てて住んでいたが、やがて役人に言われて、学校のある今の村に降りてきた。タイ政府の山地民定住政策と関連しているものと見られる。

タイの印象を男性は「楽しい」cheh pyew と語っている。戦争がなく、農民は野良仕事をして暮らしてゆけるからという理由が挙げられている。タイでは、自分たちで開拓して水田耕作を始めた一方、政府の禁止政策によって、焼畑耕作をすることはできなくなった。

キリスト教のラフ族の生活への影響は、男性のミャンマー時代にすでに現われている。

村の学校は先生 sa la を雇い、先生は公立の学校（ミャンマー語）とキリスト教会（ラフ語）の両方で教えていた。キリスト教徒は「異教徒」law ki よりも発展しているという考えが、男性の言葉の端からうかがえる。

一方、キリスト教徒ラフ族の間でしばしば見られる派閥争いは、W 村でも見られる。3 つの派閥が、W 村内にそれぞれ教会をもち、それぞれの牧師をもっている。ラフ語の識字能力をもち、それだけで生活を支えるのには足りないが、牧師は「月給を食べる者」ha pa hpu ca pa である。男性の子供のひとりも牧師として生活している。

このような内容をもつラフ族男性のライフ・ストーリーから、ラフ族住民の世界観や認識について、より個別にどのようなことが分かるだろうか。

男性のライフ・ストーリーに登場する「国」mvuh mi は、「中国」Heh Pa mvuh mi、「ミャンマー国」Man mvuh mi、「タイ国」Htai mvuh mi、「韓国」Kao Li mvuh mi である。そのうち男性の生活経験に近いものは「ミャンマー国」と「タイ国」である。

この男性と同様に、他のラフ族住民たちも、ミャンマーでの「戦争」baw da ve を逃れて、着の身着のままにタイへやって来た[50]。その際に頼ったのは、タイに住んでいた「一族の者」aw vi aw nyi であった。

タイのラフ族住民はしばしば「ミャンマー国」と「タイ国」を対比的にステレオタイプ化して語る。ミャンマー国は自然が豊かで、そこで彼らは森を燃やして焼畑耕作をやり、「一年やると三年食べられた」。しかしミャンマーは、ミャンマー軍、シャン軍、ラフ軍、ワー軍などが戦い合い、村が焼かれたり、村人が軍隊の荷物担ぎに徴用されたりする戦争状態がつづく国だった。一方、タイ国は、平和であるが森は失われて、ラフ族の伝統的な生業である焼畑耕作も禁止され、自由な移動も難しくなった国である。1997 年当時にも P 村の住民は、「タイにいるとお腹が痛い。農薬（を使った食物）のためだ」などと私に語ったものだった。

これまでのフィールドワークで私が印象づけられたのは、ミャンマーやタイなどを国民国家として絶対視していない村人の認識だった。ラフ住民をとりまく世界は、ミャンマー国、タイ国、中国のように複数の国から構成される世界として捉えられていたが、それらの「国」mvuh mi は、国境線で囲まれた領土の中に排他的に主権を行使する国民国家ではなく、複数の競合する勢力圏として、前近代的な国家に近かった。そして、ミャンマー国はミャンマー軍、タイ国は国王（haw hkan）というように、それぞれの国は人格的な主体によって動かされているものとして認識されていた。私が会った他のラフ族住民の多くと同様に、このラフ族男性もタイ国王と王族に対して、素朴な崇拝心をもっていた。タイ国は抽象的なものでなく、半ば神格化された国王に象徴される具体的な対象であった。

タイのキリスト教徒ラフ族住民は、ミャンマーにいたときにも、タイに来てからも、特定の国家の「国民」nation であったことはなかった。いずれの国においても自らをその国民とは考えていなかったからである。ミャンマーでは、彼らはミャンマー軍が支配する国の中で「国を持たない小さな民族」として暮らしており、国王が統治するタイでも同様だった。ミャンマーからタイへの移住は、彼らにとっては「国籍」の変更というよりも居住場所の変化であり、どの国においても「ラフ」（La Hu）は、少数民族として「他人より低く、他人の奴隷をする」ことに変わりはなかった。

「中国」と「韓国」とは、ラフ族男性のライフ・ストーリーの中では、経験に遠い場所として、伝聞の形で登場する。中国のラフ族のミャンマーやタイへの移民は増えているが、中国のラフ族について男性は限定的な知識しか持たない。

「韓国」は、男性の孫が金を稼ぎに行こうと不法渡航した国であるが、渡航書類の不備のために、孫は捕まり、タイへ強制送還され、お金は稼げないままに終わる。ここで語られる「韓国」は、現在孫が働きに行っている「チョンブリ」というタイ国内の町と同列に置かれているかのようである。私にとって韓国はひとつの国家であり、チョンブリはタイのひとつの県であるが、男性にとってはどちらも伝聞での知識にとどまる、どこか遠くにある、ぼんやりとしか知らない場所である。「韓国」と「チョンブリ」はおそらく孫の移動によって男性の生活世界に初めて登場した地名であり、そこには高齢のラフ族男性と若年のラフ族女性（孫）の生活世界と世界認識の違いが反映されていると言える。

4. おわりに

ライフ・ストーリーの編集と提示法についても最後に述べておきたい。本稿では、ラフ族男性のライフ・ストーリーを、比較的少ない編集を通したのみの形で、ラフ族男性と私の対話として示した。しかし、本稿が用いたラフ族女性によるトランスクリプションは完全に逐語的なものでなく、言いよどみや繰り返しの多くは省略されており、これは短所でもあり長所でもある。

本稿冒頭で紹介した Bruner（1986）は、自らの過去への語り手の反照をともなう語りから「経験」が生成されると述べているが、そこから生まれるライフ・ストーリーをどのように読者に提示すべきかという問題については検討していない。Turner と Bruner 編集の『経験の人類学』（Turner and Bruner eds. 1986）の個別章が提示するのは、調査者による編集を経た、語り手の独白のような語りである。「経験」が生成されるのが、自らの過去に対する語り手の反照であり、その反照が引き起こされるのは、多くの場合、語り手が他者に対峙

し、その存在を感じながら、その他者と対話することから生まれることを考え合わせると、Bruner のライフ・ストーリー検討には重要な欠陥があることが分かる。

東南アジア大陸部に目を向けて見ても、Chang（2014）は主に、雲南系華人の移動のライフ・ストーリーを、第三者である筆者が対象人物の人生を叙述する形式で提示している。このやり方には雲南系華人の生活史を目に見えるように描き出すという大きな長所があるが、一方で著者の叙述が生成される前の生の対話データには、読者はアクセスできず、当初の対話が調査者によるどのような編集を経て、同書で提示された一人称または三人称の語りとなったかについて、読者は知ることが出来ない。換言すれば、他者が自分と異なる世界認識をもっていることに調査者はどのようにして気づき、他者の世界観がどのようなものであるかについて理解してゆく過程の詳細から、読者は排除されているのである。

ラフ女性による、省略を含むトランスクリプションを基礎としながらも本稿は、対話形式によって私の発言を残すことで、ライフ・ストーリーが生成するより原初の過程に読者がアクセスできる利点がある。言い換えれば、少ない編集によるライフ・ストーリーの提供により、発言者の認識様式により近い形でその世界観（国家観、国境観、国籍観）に読者が触れることができると言える。

注

[1] 標準タイ語（中央タイ語）および北部タイ語（カムムアン）。

[2] チェンマイ県メーアイ郡の山。古くから山地民の集落があったことが知られている。P 村の住民の一部は、ドーイプームーンでの出生を主張することで、タイ国内で生まれたと主張していたのである。

[3] 高齢者には中国雲南地方で生まれた者もいた。

[4] 1997 年時点で P 村の 15 歳以上の住民のうち、タイ国籍所持者の割合は 33％であった（Nishimoto 2000: 24）。

[5] したがって、人類学者による他者の「経験」についての理解は、他者が自らの「経験」を解釈して表現したものを、人類学者が自らの読者のために解釈して語る、つまり、他者の物語について人類学者が物語るという二重の解釈的な過程となる。

[6] 近年には、スコット（2013）のように、国家権力からの闘争という視点から、これらの少数民族の歴史をより意識的かつ主体的な行為の過程として描こうとする試みも現われている。

[7] タイのキリスト教徒ラフ族に関するすぐれた民族誌に片岡（2006）がある。

[8] タイのラフ族のうち、5 分の 1 から 4 分の 1 がキリスト教徒推計される（西本　2009）。

[9] 私がひとりでインタビューをし、録音したデータを、ラフ語識字能力の高いラフ人女性（60 歳代）に文字起ししてもらった。その文字起こしを参照しながら、録音データを聞きかえし、日本語に翻訳した。ライフ・ストーリーを提示する形式としては、研究者による編集を最小限にするために、老人と私の対話のかたちで示した。ただし、読みやすくするために、話題の転換を一行空けて示してある。

[10] ミャンマー・シャン州南部の町。後述のラフニ（赤ラフ）下位集団が多く暮らす土地である。

[11] このインタビューでも頻出する hpaw la ve（逃げてきた、移ってきた、やって来た）という語は、単に「移動してきた」と訳しうるが、「逃げてきた」というニュアンスがつきまとう。焼畑耕作を主な生業とし、頻繁に移動を繰り返してきたラフ族の伝統を反映したものと言える。また中国雲南地方のラフ族についての民族誌（堀江　2018）によれば、当地のラフ女性が漢族と結婚することを「ヘパポ

イ」と呼ぶが、ここでも、ラフ族の土地から漢族の土地に「ポイ」（hpaw e 逃れる）という意味合いが見てとれる。

[12] ミャンマー、タイ、中国などの国をラフ住民は、「国」という語をつけて呼ぶ。ミャンマー「ミャンマー族の国」Man mvuh mi、タイは「タイ族の国」Htai mvuh mi、中国は「漢族の国」Heh Pa mvuh mi であり、それぞれの「民族の所有する地方」というニュアンスがある。本稿ではラフ語でこれらの国に言及される場合には、「ミャンマー国」「タイ国」「中国」という呼び方をする。

[13] クリスチャンは野蛮でないという含意がある。

[14] ラフ語読み書きの基礎から教えてくれたということ。K, Hk, Ng という子音に母音 a をつけて、「Ka, Hka, Nga」と発音練習するのが、バプテスト教会のラフ語教室で初めに教えられることである。

[15] 文字通りには「白人の文字」。通常、英語を指す。

[16] ラフ・バラー（La Hu Bala）は、ラフの下位集団のひとつ。後出のように、「ラフシ・バラー」（黄ラフ集団内のバラー）と呼ばれることもある。

[17] チェントゥン近くの、バプテスト派ラフ教会の中心があった場所。

[18] ここで「ラフの国」La Hu mvuh mi とは「ラフが多く暮らす土地」ほどの意味。

[19] 神学を教えていたということを、「聖書を教えていた」とラフ語では表現する。

[20] 南シャン州のモンサット周辺を指している。

[21] 伝統派のラフグループのことを「蜜蝋を点す者たち」と呼んでいる。彼らの宗教実践の中心が、蝋燭を燃やすことだからである。

[22] ここでは「ラフ」と言っているが実際は「ラフニ」のことを指している。ラフニ人が、クリスチャンでないラフという意味で「ラフ」という語を使うことはしばしば観察される。その場合「ラフ」に対する、クリスチャンのラフという意味の語は「ラフナ」あるいは「ムヌ」（Meu Neu）である。

[23] キリスト教徒が非キリスト教徒を、軽蔑を込めてよぶ言葉。英語の pagan に近い。

[24] 「峡谷」という意味の村名である。

[25] 「宗教も教えていたか」bon ka ma ve la?という表現である。かつてミャンマー・シャン州のラフ村落では、村が先生を雇い、先生はミャンマーの学校でも教え、村の教会で司牧する仕事もすることが多かった。なお本稿で便宜的に「牧師」と呼ぶのは、按手を受けた正式牧師ではなく、村教会の司牧者という意味である。

[26] Te chi kan ma te hpeh は「少しも仕事は出来なかった」という言い方だが、農業以外の、特別な技能を要する仕事はできなかった、という意味である。

[27] La hta bah ta ma caw ve（政府に反してしまう）という表現。

[28] ラフの間では、本当のキョウダイでなくとも、一族の者を年長年少に応じて「アニ」「アネ」「オトウト」「イモウト」と呼ぶことが多い。

[29] ミャンマーでは、ラフナ（黒ラフ下位集団）のほとんどはキリスト教徒である。「今はラフナが多い」というこの発言には、「今はキリスト教徒が多い」という意味合いがある。

[30] 老人が「10、20 軒でやって来た」と言ったのを、私は「12 村」と聞き違えている。

[31] どのような飛行機か不明。軍用機か。

[32] キリスト教徒ラフ族は、西暦に従い、1 月 1 日を正月日としている。しかし正月祭は、「旧年」（hk'aw pi）と呼ばれる 12 月 30、31 日に始まると捉える住民も多い。老人のここでの発言は「旧年」を「正月祭」に入れた表現となっている。

[33] バーンマイ・モックジャム村 ban mai mok cam。

[34] タイ政府は新規の焼畑耕作を禁止している。

[35] 故プミポン国王（ラーマ九世）のこと。

[36] モムチャオ momcao はタイの王室関係者に対する敬称のひとつ。

[37] W 村に住んでいた一部の人が、W 村から分かれて近くに作った村。

[38] メーサイとタチレックはタイ・ミャンマー国境の村。タイ側にメーサイがあり、川をはさんだ対岸のミャンマー側にタチレックがある。

[39] ミャンマー人が運転する乗り合いの車で行くのだと思われる。

[40] Htai li hen la?（タイ文字を／で勉強しましたか？）という言い方。翻訳は難しいが、「タイ語で教えるタイの学校に行ったか？」という意味になる。

[41] 何か意見の違いやいさかいで協力し合うことをやめたということである。

[42] 「ラフシ」La Hu shi は「黄ラフ」という意味。ここでは黄ラフ下位集団の中の「バラー」集団とい

う言い方がなされている。

[43] 「ダビデ」のラフ語発音。

[44] バプテスト・ラフの間では、村教会に「牧師」（正式な牧師でないことも多い）をまねき、各世帯から金品を拠出して、「牧師を養う」sa la hu ve ことが多い。

[45] ラフ語の名前 Ca Peu。

[46] 「アダム」のラフ語発音。

[47] タイのラフ教会「タイ国ラフ・バプテスト教会」（Htai-Lim）は、山の子供の教育のために、いくつかの郡で生徒寮を運営していた。

[48] 「レベッカ」のラフ語発音。

[49] priya yu o ve は学位を得たという意味であるが、孫は中学校または高校を卒業したと言っていると考えられる。

[50] 例えば、P 村の牧師夫婦は、ミャンマー・シャン州モンサット近くの村に暮らしていたが、タイにいる親戚を訪ねて家を留守にしている間に、村がワー軍の攻撃で焼かれてしまったために、そのままタイにとどまることになった。

文献

片岡樹　2006　『タイ山地一神教徒の民族誌：キリスト教徒ラフの国家・民族・文化』風響社.

スコット、ジェームズ・C　2013　『ゾミア：脱国家の世界史』みすず書房（James C. Scott 2009 *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. Yale University Press）.

西本陽一　2009　「周辺化と宗教変化の社会的経験：北タイの伝統派およびキリスト教徒ラフ集団の事例」博士学位論文（東京大学）.

堀江未央　2018　『娘たちのいない村：ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会.

Bruner, Edward M. 1986 “Experience and Its Expression” in Victor W. Turner and Edward M. Bruner eds. *The Anthropology of Experience*, pp.3-30. Urbana: University of Illinois Press.

Chang Wen-Chin 2014 *Beyond Borders: Stories of Yunnanese Chinese Migrants of Burma.* Cornell University Press.

Lewis, Paul. 1986 *Lahu – English – Thai Dictionary.* Thailand Lahu Baptist Convention.

Matisoff, James A. 1988 *The Dictionary of Lahu.* University of California Press.

Nishimoto, Yoichi. 2000 *Lahu Narratives of Inferiority: Minority and Christianity in Ethnic Power Relations.* Rajabhat Institute Chiang Rai.

Victor W. Turner and Edward M. Bruner eds. 1986 *The Anthropology of Experience*. Urbana: University of Illinois Press.

Experience of Trans-border Movement
The life story of a Lahu elderly man in Northern Thailand

Yoichi NISHIMOTO †

† School of Humanities, Kanazawa University, Kakuma, Kanazawa, 920-1192 Japan

E-mail: † yoichi@staff.kanazawa-u.ac.jp

Abstract

This paper describes the life story of a Lahu elderly man in Northern Thailand and studies how such abstract ideas as nation-state, national border, and citizenship are perceived by Christian Lahu people living in Northern Thailand. The Lahu people, now found in Myanmar's Shan States and Northern Thailand, are one of the highland dwelling ethnic minorities and had historically high mobility due to their swidden cultivation, the pressures of expanded governmental controls, and prolonged ethnic wars in Myanmar. This Lahu elder's life story reveals a Christian Lahu conception that the world is not comprised of different nation-states but of diverse power circles of lowland peoples in which the Lahu are not citizens of a nation-state but a weak and subordinated group in the ethnic power relations.

Keywords *trans-border mobility, life story, Lahu, Thailand, Myanmar*